

私の学生時代

グリークラブの創設



片桐 哲

私はまだ急行列車などなかった明治三十七年に、東北の仙台から二昼夜の汽車の旅をへて、普通学校に転入学してから大正二年に大同学神学部を卒業するまで、八年間、同志社に在学しました。明治も後期の時代で、日露戦争の始まった年によってまいりましたので、今から六十年以上の昔になります。当時の京都市の北の端は丸太町止まりで、電車はありませんでしたが、七条駅から北野行と出町行の単線の、今は姿を消したチンチン電車で、まだ自

動車もなく、速度の速い乗物といえば人力車だけで、貧乏学生には徒歩が唯一の交通機関だった時代でした。従って同志社は広大な御所と相国寺とはさまれた、都心から遠く隔離された閑静な同志社村とでもいった方がよい環境でした。当時の同志社は最も衰微した時代で、男子部と女子部とを合しても四百名前後の学生生徒しかいなかった小さな同志社家族でした。当時は今日とは事情が異なり、同志社と同志社教会とは一身同体で一つの経営の下にあり、同志社生活の中に渾然と融け合っていました。すなわちチャペルを中心に、聖日の礼拝式も卒業式も、若王子の墓参りも新年会も、皆一緒に行われていました。少

数の自宅通学の学生を除いては、ほとんど全寮制といってもよいくらいで、同志社村の生活は彰栄館の鐘の音で起床から三度の食事、チャペルの礼拝式、授業の合図、就床の時刻まで規則正しく進められていました。寮生は夕食後御苑の散歩がすむと、集会室に参集して聖書の輪読会を持ち、それから各自の室に戻り、自習時間に這入ります。十時の鐘で就寝という日程でした。

*

授業は五日制で月曜から金曜までは毎日チャペルでの朝拝式に始まり、全力を教室での勉学に傾注し、土曜日は終日体育のため登山・遠足・ボート漕ぎや各種のスポーツに当て、日曜日は聖日として終日霊的修養に用い、午前中は旧神学館のクラーク・ホールの教室を中心にして日曜学校と聖書の研究会を持ったのち、女子部を加えて一緒にチャペルにて聖日の礼拝を守り、午後は静かに御苑や鴨川堤の散歩や瞑想に過したものでした。金曜日の夕にはチャペルで祈祷会が守られ、彰栄館の鐘にさそわれて女子部の寮生が提灯を手にした舎監の先生を先頭に、行列を組んでやって来るのが印象的でした。日曜日の聖書研究会

は年級別に組分けされて、先生方が熱心に指導されました。加藤延年先生、大塚素先生、三輪源造先生などの熱心な指導ぶりが感銘深く残っています。まことに有難い思い出です。

チャペルでの礼拝式の光景は東側が女子部、西側が男子部の座席で、中央が先生方の御家族や一般会衆の座席という振分けでした。当時の牧師には丹羽清次郎校長、原田助社長、武田猪平総寮長が相次いで熱心に奉仕されました。今から考えて見ると当時の同志社村は中世紀の欧州の学園都市のような姿で、彰栄館の鐘が教会の鐘の役割を果たしており、チャペル中心に同志社の一切の活動が展開されていたのでした。同志社が大京都の都心の中に存在してしまい、京阪神から自家用車で多くの学生が通学している今日、文化の程度も交通事情も社会環境も全く一変してしまい、昔日の面影を偲ぶようですが無い有様で、まことに隔世の感に絶えません。

*

当時の同志社学生の課外活動の一端に触れて見ると、同志社創立以来の校祖の学ばれた米国からの伝統的な清教徒的禁慾主義の学風が強く残っており、芝居淨瑠璃等はもちろん

凡て淫褻がましき場所に立入ることは一切厳禁されており、祇園や京極などはダブー地域

であった。それに熊本バンドの入学と共に強化されたものと思われるが、歌舞音曲などは甚だ低級なるものとして高踏的に排斥する気風が強かった。それゆえに若人の元気は自然と学問上の議論や世相の批評や慷慨に吐け口を求め、弁論会などが大いに盛んに催されていた。学年別や対寮間の演説会などよく催されていた。デモステネスの故事に倣って相国寺の松林の中に這入って発声の練習や演説の予習などする者もあった。明治四十三年の秋だったと思うが、旧の京都市会議事堂で、京都府教育会主催の全国学生大演説会が催された際、関西側代表として京大・立命・龍谷と共に同志社から出演した神学校の榎本修君の熱弁が関東関西を圧して断然光っておった事など記憶に鮮やかに残っている。私より歳は上であったが一年下の及川八楼君の校祖の逸事から血鞭と題した対校演説会での弁説が若人の血を沸かした感動的な出来事など忘れることが出来ない。当時の名弁士としては前述の榎本君の外に、神学部には松原大八君や沖田（大塚）節治君、専門部には谷岡勝美君や

右の及川君など錚々たるものがいた。

*

学究的な修道的な学生たちは教室以外でもよく先生に質問をしたり、金土などの夜には三三五誘い合わせて先生の宅を訪問して、御高説を拝聴したものである。私は保証人を御願していた関係からよく波多野培根先生宅を訪問したものである。先生は端座されて瞑目したまま諄々と御高説をはかれるので、足をくずすことが出来ず、たびたび難行を嘗めたことを思い起すのであるが、学問と教養を深めるためには古典を原語で研究することの重要性を説かれたことがあった。そうした御教訓などが知らず識らずのうちに、私をしてヘブライ語の研究に進ましめた遠因となったように回想させられるのである。このように教師と学生との人格的接触はまことに濃厚であったので、設備の不足や不満をよく克服して年月が経てば経つほど同志社教育に対する感激が深まるばかりである。

*

当時の学生スポーツは柔剣道の外に日露戦争の影響が相撲道が盛んになり、東寮の第三寮の前庭に土俵が新設されて盛んに稽古が行

われ、品川義介君など得意の業を發揮していた。そうした稽古場に謹厳そのものといったような和服姿の波多野先生がたびたび現われて奨励されていられたのも忘れられない印象である。こうした国粹的氣風の復活の影響か、寮舎内では夜間よく肝試しというものが行われていた。暗い不気味な夜中に相国寺の竹藪の奥にある石燈籠の所まで、ところどころに控えている上級生の嚇しの声に肝をつぶしながら往復させられることなど行われていた。

学生スポーツといつてよいか知らないが、同志社の旗奪いの競技は当時の同志社学生としては忘れることの出来ない勇壮なものであって、運動会でのクライマックスを飾るものであった。後日学生数が増加するようになってからは拡張された現在の校庭に移されたが、以前は上加茂神社の大鳥居を這入った左側の芝生が恒例の運動会場であった。男子部の学生生徒の中から選抜された青竜白虎の二部隊が分かれて三メートルくらいの棒の先に立てられた旗を奪い合う競技である。まことに猛烈な攻防戦であり肉弾戦であった。この競技に士気を鼓舞するため、開始前に剣舞が演ぜられたものである。当時の美少年阪本行

郎君の妙技が今なお脳裡から離れない。

日露戦争がわが国の勝利に終つて急に世界の日本に飛躍したためか、旧来のスポーツ界にも洋風のものが増え、台頭して来た。もちろん同志社には創立以来の米国との密接なる関係と多くの宣教師の感化で、ベ이스ボールやア式蹴球のまねごとは早くより行われていたが、素手で投球し合ったり、大きなボールを蹴合ったりする程度の幼稚なものであったが、漸次進歩して行き、放課後や土曜日などには、御苑の北東側の芝生が特に同志社学生生徒のためその使用を公認されていた。私が大学神学部に進んで後、選ばれて東寮の第三寮の寮長に任命され、普通部の少年たちの監督の責任を負わされるや、勉学と徳育との外に体育の増進にも責任を痛感し、寮生にベ이스ボールを奨励することを決心し、ミットやグローブその他一揃いの用具を購入して、やり出したのはよかったが、その費用を運動具店に支払うのに、長い間四苦八苦したことを思い出されるのである。ラグビーが盛んになったのもその頃であつて、市内の三高との対校試合には全校をあげて応援し、血を沸かしたものであった。

＊

こうしたスポーツ界における洋風の流入と共に学生の文芸方面にも漸次洋風が台頭しかけて来た。歌舞音曲を卑しいものとして排斥する封建性と堅苦しい禁欲主義的ピウリタンの学園内にも、もう少し潤いのある生活を、高い教養を維持しながら趣味の豊かな生活、堅固な徳行を維持しながら芸術の香り高い生活、特に若人の潑刺たる氣魄を発現させる合唱芸術、そうしたものを目指して動き出す氣運が同志社内に漸次台頭しつつあった。そうした氣運を頓に強化したものは、同志社内部からではなくして、各地方で別々に宣教師たちの感化を受けて同志社に入学して来た者たちの間から醸し出された、清新な音楽的活動からであった。遠い北海道の札幌市で音楽一家として有名だった宣教師ローランド氏の感化と指導を受けて、伝道者たらんとして同志社神学校にやって来た渡部守成氏は、ポリウムのあるバスの歌手であつたし、少し遅れて同じく札幌から神学校に入学した海老沢亮氏もバスの歌い手であつた。それから東北の仙台市で宣教師デフォレスト氏夫人やブラントシヨウ女史から仕込まれて教会で独唱など



満鮮演奏旅行(1917年夏) 左より山口隆俊・原忠雄・平田甫・小島応・大中寅二・堀内清氏

していた速水(秋保)藤助氏がこれまた道仏者を志望して第二高を中退して同志社にやって来た。同氏に後れて三年後には小生も仙台

からやって来た。次に東海道の名古屋市中音楽の盛んな美以派の宣教師たちの感化を受けて伝道者を志して入学して来たテノールの近藤優、バスの境野周次郎の両氏、近畿からでは神戸女学院の宣教師たちの活躍していた神戸教会から同志社普通学校に入学して来た佐野千倉、清之助、横田確三の両君、京都在住者としては日基派の牧師の息子だった穂永斉君、平安教会の堀内清君など比較的年少者ではあったが歌が上手であった。こうした歌の上手な者たちが期せずして同志社内合唱音楽の気運を興隆する役割を果たす存在となった。もちろん主として教会の礼拝や宗教的集会の応援として校外で活動していたのであるが、同志社の礼拝式や宗教的集会にも力を入れていたし、彼らの音楽的水準は高かったので、漸次その感化と影響とが内部に浸透せざるを得なかった。しかし彼らの主たる活躍の舞台は市内の教会にあったので近藤、境野、堀内、海老沢の諸君は四重唱団を組織し、デビクワイヤーと称して大に活躍しておった。学内では普通学校の比較的若い者の間では長谷川直吉、片桐哲、横田確三、宇野重孝の四名が四重唱団を組織して、卒業式の際、

三輪源造先生作詞の歌を合唱するようになっていた。明治三十九年の早春であったが、東北地方の冷害飢饉救済のための慈善音楽会を開催する議が同志社内の東北出身の教師と学生との間に纏り、チャペルで京都では最初の洋楽だけの音楽会を催したのであった。その際に三十名ばかりのメンバーでカンタート「復活節の歌」を合唱したのであったが、大変好評であって俄然音楽熱を高揚する機縁となったのであった。そうした音楽熱が盛んになつては来たが、年長の神学生が多数であり指導権を握っていたので、自然と校外の教会中心の活動が対象であった。従つて讃美歌や宗教歌が練習の主要部分を占めていた。これに対して学内の一般学生、なかでも寮生を対象とする音楽熱の高揚を目指して合唱団を組織し始めたのが私で、大学神学部に進学するや、間もなく選ばれて東寮の第三寮長に任命されたのを機会に、前述のように体育増進のためベースボールを開始するとともに、清純なる情操涵養の目的を以て合唱を奨励することに決意し、ベビオルガンを購入して讃美歌を正しく唱う外に外国の民謡やカリジソングを教えるようにした。そして寮の親

晩会や新年会や演説会などに出演せしめて好評を博するようになった。しかし合唱などをする者は歌派とか不良グループとか非難する者が跡を断たず、低音部を牛のなき声などと貶して牛肉のすき焼などを喰っていると「牛の共喰」などと冷やかす有様で音楽に対する無理解はなかなか烈しかったものである。しかし漸次合唱が歓迎せられるようになり、合唱団に加入を希望する者が多くなって来た。

そうした希望者があることにベビオールガンの側に立たせて、音階を試した上で声質を選別したのであるが、後日バスの名歌手としてグリークラブで活躍した小島応という脊の高い少年が合唱団に加入したいというので、検査した際、少年としては珍らしく低音が出るので段々と低い音階を出させて行ったが限界に達したと見え沈黙してしまった。更に気張っても一音階下を出すよう促がしたところ、大きな口を開いて長い舌を出して見せたので、思わず大笑いをしたという珍事さえあった。原始時代の思ひ出に苦笑を禁じ得ないものがある。そうこうしている内に寮生間にも通学生間にも同好の士が参集するようになって来た。当時はまだ男女席を同じうせず

といった風習が消えず、聖日の礼拝式や創立記念式や卒業式などで男女が一緒に讃美歌を歌う機会があつても混声合唱団組織など全く考え及びもつかなかった時代で、男性は男性だけで合唱団を組織する以外に途はなかったのだ、特別な意味を以て男声合唱団を組織したのでなかったのである。私の養成していた普通校の少年たちも漸次進學して上級に進むに従ひ神学部以外の学生も増加するようになり、聖歌以外の歌曲を希望する気運も強くなり、ポピラーソングや外国の学生歌をも歌うことが多くなつて来た。外国の大学で組織されて

いるグリークラブの名称には、愉快な元氣な合唱クラブという意味を持つているところに大いに心引かれて、同志社にもそうしたクラブを組織することに決心したのが同志社グリークラブの命名の由来であつた。学生の音楽活動に多大の関心を示されたシドニー・ギユリック博士から御出身のエール大学のグリークラブ歌集の本を拝借して、その中から種々の曲目を使用するに至つた。それから音楽家の宣教師であり、名テノール歌手であつたオルチン師が神学校に音楽を教えるため、毎週大阪からやって來られたが、同氏から提

供されたタウナー氏編の男声合唱集の単行本が創始当時のグリークラブの唯一の種本となつたのはそれからである。

グリークラブの名称が生れても全同志社が対象であつたから、大学とか中学とかの区別なしに、比較的最近まで、同志社グリークラブの名称が使用されていたのはそのためであつた。六十年の歳月の歴史はあらゆる点において一大進歩と変革を遂げてしまつてゐる。

当時四百名たらずの全同志社の学生生徒は今日では二万以上に達しているし、音楽の水準も驚異的な躍進を遂げてゐる。大学グリークラブだけでも当時僅か二十名前後だったものが百五十余名に達する大組織に発達している。その技術面でも素晴らしい成長を遂げてゐる。当時の原始的幼稚さだった六十年前の状況を追想して転た感慨にたえぬものがあるのは当然であらう。当時夢想だにし得なかつた今日の進歩を見る時、ただただ神に感謝する外に途はないのである。願わくば同志社の精神教育の面においても同様の進歩を遂げ得たならばこれに越した感謝はあるまいともしばらそれを祈求してやまないものである。

(校友・梅花学園長)